

# 国語科における「思考・判断・表現」の評価のあり方

山内 裕介

横浜市立岡村中学校 教諭

## 1. 「思考力・判断力・表現力等」と「活用」という学習活動

平成19年に改正された学校教育法第30条第2項は次のようなものである。

前項の場合においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。

以上において、次の「学力の3つの要素」が示された。

- 【1】 基礎的・基本的な知識・技能
- 【2】 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等
- 【3】 主体的に学習に取り組む態度

この中で、【2】の「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」の評価について実践を踏まえながら、私の考えを述べていくことが本稿の趣旨

である。

国語科における「思考力・判断力・表現力等」をどのように評価するかということについて、「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校 国語）第3編 評価に関する事例 1 評価規準の設定について（1）評価規準の設定における基本的な考え方」（国立教育政策研究所 教育課程研究センター 平成23年7月）では、以下のように述べられている。

単元における評価に当たっては、基本的に、「国語への関心・意欲・態度」、「話す・聞く能力」（「書く能力」、「読む能力」）、「言語についての知識・理解・技能」の各観点の評価規準を設定するようにする。具体的には、「評価規準に盛り込むべき事項」を参考にし、言語活動と関連付けて設定する。

国語科における評価の観点（「国語への関心・意欲・態度」を除く）は、各領域及び〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕に対応している。すなわち、「話すこと・聞くこと」の指導事項を指導した内容については「話す・聞く能力」で評価する。同様に、「書くこと」の指導事項を指導した内容については「書く能力」、「読むこ

と」の指導事項を指導した内容については「読む能力」〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の事項を指導した内容については「言語についての知識・理解・技能」で評価する。

「話す・聞く能力」, 「書く能力」, 「読む能力」については、基礎的・基本的な知識・技能と「思考・判断・表現」とを合わせて評価する観点として位置付けたことに留意する必要がある。国語科の場合、言語で考えて表現したり理解したりすることが基本的な学習活動である。そのため、言語による「思考・判断・表現」と、言語の知識・技能とは密接、不離の関係であり、個々に分けて評価することは困難である。そこで、「話す・聞く能力」, 「書く能力」, 「読む能力」においては、生徒が知識・技能を活用して思考・判断・表現している状況の評価できるよう、評価規準を設定する必要がある。

(下線は引用者による)

以上(特に下線部)を踏まえると、単元を作るに当たっては「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域の指導において、生徒が知識・技能を活用して取り組めるような学習活動を教師が意図的・計画的に設定することが必要となる。また、「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」の3観点が、基礎的・基本的な知識・技能と「思考・判断・表現」とを合わせたものだということに着目すると、単元の指導において、知識・技能を活用した生徒の活動を行わないで評価することは、3つの観点の評価としては不十分なものになってしまうのである。

このように、「思考・判断・表現」の評価に

当たって、「知識・技能の活用」は必要不可欠なものであり、単元を構想する時には、知識・技能を活用した学習活動を意図的・計画的に取り入れていくことが求められている。

## 2. 「活用」を意図的・計画的に取り入れた実践事例

先に述べた「活用」を意図的・計画的に取り入れることについて、実践に基づいて具体的に述べていく。以下は、私が中学2年生に対して行った「地域の逸品をプレゼンテーションする」という単元の概要である。

### 〈指導事項〉

- 目的や状況に応じて、資料や機器などを効果的に活用して話すこと。  
(「話すこと・聞くこと」ウ)
- 話し言葉と書き言葉との違い、共通語と方言の果たす役割、敬語の働きなどについて理解すること。  
(「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」 イー(ア))

### 〈言語活動〉

調べて分かったことや考えたことなどに基づいて説明や発表をしたり、それらを聞いて意見を述べたりすること。

(言語活動例 A-ア)

〈評価規準〉

| 国語への関心・意欲・態度   | 話す・聞く能力   | 言語についての知識・理解・技能  |
|--|---|--|
| ①伝えたい内容を相手に理解し、共感してもらうために、集めた材料を整理し、資料の提示の仕方を工夫したり、機器を活用したりして話そうとしている。 | ②多様な方法で集めた材料を目的に応じて整理し、提案の仕方を考えながらプレゼンテーションのための資料を作成している。<br>③地域の逸品の魅力を伝えるために、資料の提示の仕方を工夫したり、機器などを効果的に活用したりして話している。 | ④話し言葉と書き言葉との違いについて理解し、目的に応じて口頭で説明する内容と資料で提示する内容とを選択している。 |

〈指導と評価の計画（6時間）〉

| 学習目標(☆)・学習活動と内容   | 評価規準と指導の手だて(○)〈評価方法〉  |
|---|---|
| 1 学習についての見通しをもち、グループで紹介する地域の逸品を決め、プレゼンテーションに必要な材料を集める計画を立てる。<br>・どのような材料が必要か？<br>・どのような方法で集めるか？                                   | ○プレゼンテーションのモデルを示し、学習を通して目指す姿をイメージさせる。<br>○今後の学習を行っていく準備としての時間であり、評価規準を設定し評価することは行わない。   |
| 2 集めた材料を整理しながら伝えたい事柄を明確にし、プレゼンテーションの構成を考える。<br>・集めた材料を分類して、3つのおすすめポイントを決める。<br>・それぞれのポイントを話すために必要な材料を整理する。                        | ② 多様な方法で集めた材料を目的に応じて整理し、提案の仕方を考えながらプレゼンテーションのための資料を作成している。<br>〈評価方法・記述の確認～日常的な評価〉   |
| 3 プレゼンテーションの準備として、聞き手に提示する資料と発表のメモを作成する。<br>・聞き手に提示する資料と、それを提示しながら話す内容を考えて、発表のメモを作成する。<br>・資料を作成し、OHCとテレビ画面を使いながらプレゼンテーションの練習をする。 | ○【補充】集めた材料を、地域の逸品の「味」「見た目」「評判」など様々な観点で分けて、ポイントを整理させる。<br>○【発展】ポイントについて材料が整理できている場合には、伝えたい内容をより効果的に伝えるための工夫について考えさせるよう助言する。<br>④ 話し言葉と書き言葉との違いについて理解し、目的に応じて口頭で説明する内容と資料で提示する内容を選択している。<br>〈評価方法・記述の分析～日常的な評価〉 |
| 4・5 プレゼンテーションを行う。<br>・各グループ3分程度で行う。<br>・聞き手は、「分かりやすかったか」「食べたいと思ったか」の2つの観点で評価し、コメントを書く。  | ○【補充】話の中心を明確にし、それに沿って口頭で説明する内容と提示する資料とを決めるよう助言する。<br>③ 地域の逸品の魅力を伝えるために、資料の提示の仕方を工夫したり、機器などを効果的に活用したりして話している。<br>〈評価方法・行動の観察～記録する評価〉   |
| 6 学習の振り返りを行う。<br>・聞き手からの評価やプレゼンテーションの映像を見ながら、次の3点について考えたことを書く。<br>「身に付けた力」<br>「こうすれば良かったこと」<br>「他のプレゼンテーションを見て学んだこと」              | ① 伝えたい内容を相手に理解し、共感してもらうために、集めた材料を整理し、資料の提示の仕方を工夫したり、機器を活用したりして話そうとしている。<br>〈評価方法・記述の分析～記録する評価〉<br>○【補充】聞き手からの評価に書かれていたことを基に、グループの課題や良かった点を挙げさせる。  |

本単元の実践に当たっては、それまでに生徒が身に付けた知識・技能を活用させて取り組むことのできる学習活動を積極的に意図的

に取り入れることを意識した。

まず、取材の段階である。生徒がプレゼンテーション（以下プレゼン）のために取材す

るテーマは、小さな商店の多い地域性を利用し、地域の隠れた逸品（食べ物）とした。生徒たちはそれまでに身に付けた知識・技能を活用して、この取材に取り組んだ。最も多くの生徒が活用したのはインタビューである。インタビューの仕方は、1年次の総合で行った「職業インタビュー」と関連させ、国語科の授業でも学習している内容である。生徒たちは、予め取材の目的に沿って質問の内容を決め、相手に失礼のないよう話し方を気を付けてインタビューし、メモを取ったり写真を撮ったりして必要な材料を集めた。

次は集めた材料を整理する段階である。ここでは主に2つの既習事項が活用された。

一つ目は、1年次の「鑑賞文を書く」（新学習指導要領第1学年B（2）ア「関心のある芸術的な作品などについて、鑑賞したことを文章に書くこと。」）単元である。鑑賞文の単元では、自分が選んだもののよさについて、3つの観点を設定し文章にまとめることを学習した。生徒はこの学習を活用し、プレゼンする逸品について複数の観点から話す内容を決めることができた。

二つ目は、1年次の「レポートを作る」（新学習指導要領第1学年B（2）イ「図表などを用いた説明や記録の文章を書くこと。」）単元である。ここでは、あるテーマについて集めた様々な材料を分類・整理して、伝えたい事柄を明確にし、図表と関連させながら文章にまとめることを学習した。これを活用させ、写真や地図などの図表の他、プレゼンの特性を生かし実物や実演などと関連させながら、プレゼンの際に提示する資料を作成した。

最後に、プレゼンを聞く段階である。1年次に行った「3分間スピーチ」の単元では、

話の内容について質問したり助言したりする学習を通して、自分の考えとの共通点や相違点を整理する力を身に付けた。それを活用して生徒はプレゼンを聞きながら、資料の提示の仕方や話との関連など様々な点について整理することができた。

このように、本単元では、課題を解決していく様々な段階でそれまでに生徒が身に付けた知識・技能を活用させる学習活動を取り入れた。そうすることによる利点はたくさんあるだろうが、ここで私は2点について述べる。

1点目は、単元のねらいが明確になることである。プレゼンを言語活動として単元を構想する場合には、スタートからゴールまでに「話す能力」について様々な要素が含まれる。時には、先に挙げたように「書く能力」など他領域の能力の要素が含まれることもある。従って、それら一つ一つを指導しようとして、その単元で中心となる指導事項が一体何なのか、焦点のぼやけた授業となってしまうことも多い。活用する学習活動を意図的に取り入れると、その単元において中心となる指導事項と既習の事項を活用して取り組む内容とを整理することができる。本実践では、「目的や状況に応じて、資料や機器などを効果的に活用して話すこと。」が中心となる指導事項である。取材や資料作成などの活動は、その指導事項を指導するための準備の段階であり、「目的や状況に応じて、資料や機器などを効果的に活用して話す」ために行う活動である。それら準備の活動が、既習の事項を活用しながら進められることは、つまり本単元の中心となる課題が既習事項を活用しながら解決されるということである。そうすることによって、単元の中心となる指導事項が明確になり、

その学習も生徒が考えながら主体的に活動するものとなる。

2点目は、既習の内容が定着することである。国語科の授業で学習した内容・身に付けた力は、ある場面に応じたものであることが多い。例えば、先に挙げた「インタビュー」では、1年次に行ったのは、地域の事業所で働く人を相手に、仕事の内容や働くということがどのようなことかを知るためのインタビューであった。そこで身に付けた力を本単元では、お店の人に、そのお店の逸品について自分が得ようとする内容を聞き出すためにインタビューするのである。相手や目的が変わることはもちろん、1年次では授業の課題として教師によって設定されたものであったのを、本単元では自分でその方法を選び、主体的に行うことによって、既習の内容がより充実した力として生徒に身に付いた。

### 3. 「思考・判断・表現」の評価のために

国語科において「思考・判断・表現」を評価するためには、生徒がそれまでに身に付けた知識・技能を活用する学習活動を取り入れた単元を構想し、実践することが必要であることを述べてきた。

最後に、「思考・判断・表現」の評価の仕方について触れたい。国語科の評価において「思考・判断・表現」は「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」の3観点の中に「言語の知識・技能」とともに含まれるものである。したがって、評価に際しては国語科の3領域の指導事項に即して評価規準を設定して行うこととなろう。

しかし、評価については注意しなければならない点がある。それは、結果だけを見るの

ではないということである。先の実践例に即して言えば、私は「話す・聞く能力」の評価規準として「③ 地域の逸品の魅力を伝えるために、資料の提示の仕方を工夫したり、機器などを効果的に活用したりして話している。」を設定した。これを評価する方法として、プレゼンの様子を観察するという方法をとったが、これだけでは不十分である。ビデオで撮影して、繰り返し見ながら行動の観察による評価を行ったが、そこから見えるものは学習の結果としての生徒の「知識・技能」がほとんどである。そこまでに至る課題解決の中で生徒が発揮した「思考・判断」については、なかなか見取することはできないのである。

それら进行评估するためには、課題解決に向かう生徒の行動の観察や終末に行う振り返りなどが必要となる。つまり、生徒一人一人の課題解決の道筋に即して、信頼性・妥当性のある「言語の知識・技能」や「思考・判断・表現」の評価を行うためには、一つの評価資料ではなく、複数の評価資料を総合して行うことが有効な手段である。